

生体反応を考慮した注意喚起情報提供の効果の評価

張峻屹¹・谷本修一²・楠橋康広³・林光緒⁴・藤原章正⁵

¹正会員 広島大学教授 大学院国際協力研究科 (〒739-8529 東広島市鏡山 1-5-1)
E-mail: zjy@hiroshima-u.ac.jp

²正会員 日本工営株式会社 (〒102-8539 東京都千代田区麹町 5 丁目 4 番地)
E-mail: shurashushu1@gmail.com

³正会員 西日本高速道路(株) 中国支社事業調整部・調査役 (〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-26-1)
E-mail: y.kusuhashi.aa@w-nexco.co.jp

⁴正会員 広島大学教授 大学院総合科学研究科 (〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1)
E-mail: mhayasi@hiroshima-u.ac.jp

⁵正会員 広島大学教授 大学院国際協力研究科 (〒739-8529 東広島市鏡山 1-5-1)
E-mail: afujiw@hiroshima-u.ac.jp

交通事故発生原因の約9割が発見の遅れや操作・判断ミスなどのヒューマンエラーによる。これらのヒューマンエラーを減らすため、注意喚起情報の提供が有効であると考えられるが、不用意に注意喚起が連続して提供されると逆効果をもたらされる可能性もあり、適切な注意喚起方法が求められている。本研究では、注意喚起情報の提供効果を評価するため、山陽自動車道「志和IC～広島東IC」の下り線の事故多発区間を対象に、カーナビによる注意喚起情報の提供効果について、情報提供の有無、情報提供方法（音声か画像）を組み合わせたいくつかのシナリオを設定し、繰り返し走行実験により検証した。瞬目・心拍数・車両挙動情報を使用して、瞬目評価モデル、心拍数評価モデルと走行リスクモデルを構築し、高速道路において注意喚起の効果を生理心理学と行動学の視点から明らかにした。

Key Words : *traffic warning information, biological reaction, driving risk, probe vehicle experiment*